

エンコウの恩返し・邑智郡邑南町井原 令和3年5月25日掲載予定

収録・解説・酒井 董美^{たよし} イラスト・福本 隆男



語り手 柘植忠義さん（明治41年生まれ）
収録・昭和59年8月25日

あらすじ

この井原川は、昔からきれいであちこち淵もあり、みんなで足を洗ったり、水浴びをしたり、魚を捕ったりして遊んでいる。

しかし、昔は毎年、子どもがエンコウに肝を抜かれて困っていた。

ある日のこと、イクツガンの方の古い家の馬を洗いに連れて行ったところ、淵に入っていた馬が急にとんで家へ帰った。その馬の尻尾の先に何か下がっている。落としてみると、それがエンコウだった。人々は寄ってたかかって、毎年、子どもが殺されるから、こらしめてやろう」

「いや、たたく殺せ」
「火あぶりにしてやれ」。このようににぎやかな状態だった。

するとその家のおじいさんが出てきて、
「まあ、みな衆、待て待て、このエンコウを殺したところではない。次々子どもがエンコウにやられても

つまらんことだから、こんどは一つわしに任してくれ」と言う。

みんなも「そりや任そう」と言ったので、おじいさんはエンコウに、
「みんなはおまえたちが毎年、子どもを殺すので怒って、おまえを殺す言うんじやが、わしは何とか助けてやりたいんじや。その代わり、これからは井原川ではエンコウに捕られたちゆう者がおらんようにしちやどうか」と話したら、

「そりあもつともなことです。これまでは悪いことをしましたが、もう二度と井原川では子どもを殺しません」とエンコウも約束をした。

それ以来、井原川ではエンコウによる被害はなくなつたので、みんなは喜んで、「じいさんもえらいがエンコウもよいう約束を守ったもんだ」というで現在まで伝えてきているのだ。

だから、おまえたちもいくら水浴びしてもいい、魚釣りに行つてもいい、しかし、川はきれいにしておかぬとエンコウが困るいうことになつていんだ。それぼつちり。

解説

「河童駒引き譚」として知られ、全国にその類話がある。エンコウというのは石見地方で河童を意味する方言である。それに対して松江あたりでは河童のことを「川子」と呼んでいる。

中にはこのとき捕まった河童が「以後、この川では子どもを捕りません」と書いた証文が残っている、という地方もあり、筆者の子どもも時代に「松江市の西川津ではその詫び証文が存在している」と、友だちがまことしやかに話しているのを聞いた記憶が残っている。

浜田市三隅町では、エンコウに子どもを捕られてい嘆いている人々に、そこを通りがかった弘法大師が、ほとりの岩にまじないの文言を書き、「この字が消えない間は河童は子どもが捕れないようにした」と言って去られた。

エンコウは夜の間に字を消そうと文字をなぞるが、朝になればいっそう字が深くなつている。畜生の悲しきで文字の上をなぞるので、いっそう深く刻まれるのだ、という話が残されている。

（元島根大学法文学部教授）